

# 「伝えよう！自分がおすすめる高知県の食」

いの町立枝川小学校

教材 第4学年「ふるさとの食を伝えよう」（新しい国語四下 東京書籍）

発行  
令和5年12月  
中部教育事務所

## 本単元の重点指導事項 B「書くこと」ウ 考えの形成

◇自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫することができる。

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
①考えとそれを支える理由や事例、情報と情報との関係について理解することができる。 【(2)ア】	①自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫することができる。 【B(1)ウ】 ②書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考慮することができる。 【B(1)イ】	①言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。

## 本時で達成したい目標

◇おすすめる高知県の料理や特産品が伝わるように、おすすめること（自分の考え）と理由や事例を関連づけて、書き表し方を工夫することができる。

## 教材研究会協議からのご意見



(参加者より)

- ・「自分の考えと理由や事例を関連づける力」に向かって、子どもが「おすすめるものを決めて、その理由を明確にもつこと」が柱になるのではないか。その理由を分かりやすく説明するために、情報を収集し、選択し、どの事例を挙げれば伝えたいことがしっかりと伝わるのかを考えるという学習の流れができる。
- ・指導計画の中に教科書を扱う時間が必要ではないか。教科書の紹介文とそれに対するエラーモデルを読み比べる学習活動を設定することも考えられる。すると、おすすめること（自分の考え）と理由や事例がつながっていることや、「例えば」という言葉を使って具体例を挙げることで、この言葉があると食べたいなどの「書き表し方の工夫」に子どもたちが気付くのではないか。
- ・「具体例や理由を述べる良さ」が指導計画に一貫してあると、文章の説得力につながる。また、相手が「食べたい」「買いたい」ような言葉を考えて文章を書くこととしている姿も見方・考え方を働かせている姿ではないだろうか。

講師 大塚健太郎 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 ～教材研究会の講話より 一部抜粋～

### ○指導事項が育成された児童の姿を明らかにする。

国語は、「言語活動」を通して「言語能力」を育成する教科である。「言葉による見方・考え方」が働くよう、指導事項を確認しながら、児童が「言葉」に着目し、その言葉の使い方や働き方等について「自覚的」になるよう授業改善をすることが重要である。単元づくりの際には、本単元で育成する資質・能力に対する児童の実態を分析し、指導事項によって育成した児童の姿、つまり指導した結果、児童がどのような姿になるのかを明らかにした上で、そのギャップを埋めるための言語活動や手立てを考えていくことが大切である。本単元でいうと、「おすすめる」自分の思いと、それを支える理由や事例がきちんと整合性がとれているかどうかを意識することである。また、「書き表し方を工夫する」とは、どのようなことが書いていたら「工夫している」ということになるのか、授業者が明確なものをもっておく必要がある。

### ○資質・能力を育成するための学習改善について

学習評価をすることが資質・能力を育成するために非常に効果を発揮する。例えば本単元でいうと、「おすすめるもの」を調べた時、自分が欲しかった情報を得ることができたのかを理解することで、次時に、再度、情報の収集が必要かどうかを児童が判断し主体的に学習を進めることができる。このように、児童自身が学びを振り返り、現状を理解し、学習改善を自分で進めるといふPDCAを回せることが大切である。

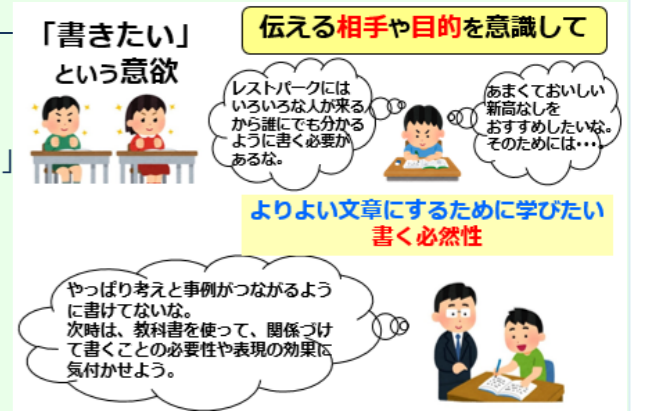


## 授業づくりのポイント

### ① 児童が主体的に取り組みたくなる学習過程 ～「書きたい」という意欲と学ぶ必然性を児童から引き出す～

児童が学習を進めていくうえで、「書きたい意欲」は大きな原動力となる。書く過程では、伝える相手や目的を意識しながら、「どのような理由や事例を挙げれば自分の考えがより伝わるのか」「もっといい書き方にするためには」と試行錯誤を繰り返していくことが大切である。枝川小学校では、児童が主体的に学習に取り組めるよう、単元の導入で、社会科の学習等と関連づけたりと、具体物を提示したりして、児童から「高知県の料理や特産品の魅力を伝えたい！」という思いを引き出した。そのうえで「観光客におすすめる高知県のものについて、理由や事例を挙げながらリーフレットにまとめ、紹介する」という言語活動を児童と共有している。情報の収集、内容の検討、構成の検討等のそれぞれの学習過程で相手や目的を意識することで、それぞれの過程を行きつ戻りつしながら、おすすめることと理由や事例がつながっていることや表現の効果を確かめたり工夫したりできるようにした。

また、指導計画の早い段階で、一旦、既習を使ってリーフレットを書く学習活動を設定することによって、児童に「書いてみたけど、うまく書けないなあ。」「みんなは、どのように書いたのだろう。」といった課題意識を持たせ、「よりよい文章にするために書き方を学びたい」という「学ぶ必然性」を児童の中から引き出すことをねらった。まず、リーフレットを書かすことで、教師は児童の実態を把握し、次時への手立てにつなげることができた。例えば「伝えたいことと事例がつながっていないから、次時は教科書を使って考えと理由や事例を関係づけることの必要性やその効果について気付かせよう。」といった学習活動を考えることが児童の「書きたい」という意欲につながった。



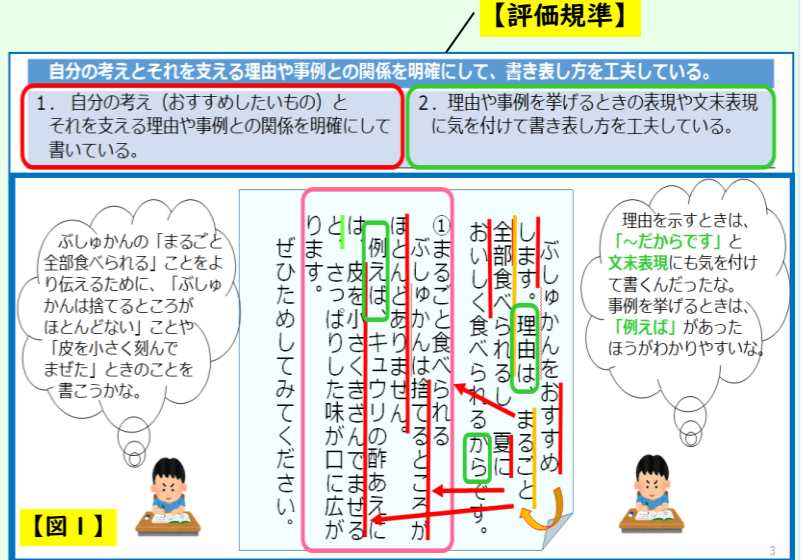
### ② 本単元で言葉による見方・考え方を働かせる児童の具体的な姿

小学校国語科の目標は、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し、適切に表現する資質・能力を育成する」ことである。本単元で資質・能力の育成された児童の姿とは、「情報と情報との関係について理解している」「自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にしている」「書き表し方を工夫している」姿である。

図1は、本時における言葉による見方・考え方を働かせている児童のイメージ図である。

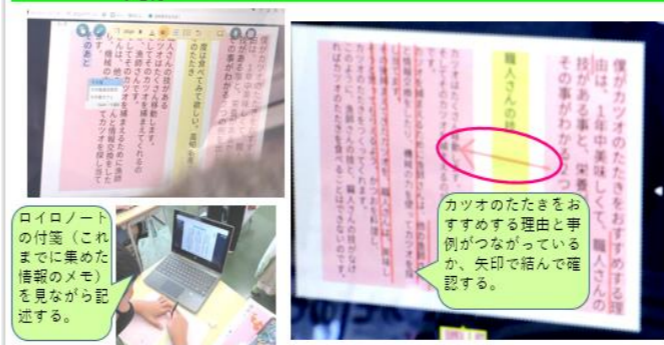
評価規準の「自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にしている」とは、自分がおすすめる高知県の料理や特産品の理由とそれを支える事例、事例と事例を関連させるなどして書いている姿であり、「書き表し方を工夫する」とは、「理由や事例を挙げる時の言葉や文末表現に気をつけて書き表し方を工夫している」姿である。その時に、「どんな言葉を使って書こうかな。」とか「この言葉の意味はこうだからここでこの言葉を使うとおすすめることとつながるな。」とか言葉の意味や働き、使い方に着目して、文章の中で吟味していくことが言葉による見方・考え方を働かせることである。

育成を目指す資質・能力に向かうための手立てとして指導計画の5時間目には教科書を使い、7、8時間目にはグッドモデルとエラーモデルを対比して「何に気をつけて書くのか」を焦点化させている。このように、何に気付けさせるか焦点化し、気付けさせたいところに確実に気付けさせ、理由と事例、事例と事例を関係づけて書くことができるようにすることが重要である。



## 書くこと 活用事例

第4学年「伝えたい！自分のおすすめる高知県の食」 育成を目指す資質・能力 ①書くことウ、自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫する力



### ③ ICT の効果的な活用

本時では、自分のおすすめる高知県の食べ物や特産品について、記述するときに ICT を活用した。児童は、これまでに保存したロイロノートの付箋（おすすめるものの情報メモ）を用い、自分のおすすめる理由を具体的に説明する事例として活用できそうな情報を取捨選択しながら記述していった。そして、本当につながりがあるのか、左のような矢印で結んで確かめたり、友だちと見合って検討したりすることで、より分かりやすい文章に修正していく姿があった。このように、ICT を活用し、「自分のおすすめる理由と事例がつながっているか」を視覚的に捉えることで、目指す資質・能力が身に付いたかを児童自身が確かめ、追記したり修正したりすることが可能になる。